

## 言葉と共に生きる

これは、中央公論の2011年9月号に掲載された特集「震災犠牲者の遺したメッセージ」のテーマです。

企画、構成は作家の長蘆安浩氏の手になるものですが、彼はこれまでも、本誌で「遺書、拝読」という連載を通じ死者の生きていた時間に迫る営みを続けておられます。

勿論、今回の特集で取り上げられた言葉の数々は、遺書として書かれたものではありません。それだけに、なお一層、胸の詰まる思いがします。

あの大震災で、生死を分けたものは何だったのでしょ。それは、全くの偶然に過ぎませんが、生き残った者にとって、それは余りにも残酷な現実ではないかと思ひます。

小学3年生の息子、誠君を亡くした父親が「私は今のところ葬式を出すつもりはない。葬式を出してしまったら、誠が遠いところにいってしまう気がするから」と述べていますが、残された家族の皆さんは、今なお心に深い傷を負い、悲しみを引き摺っています。

けれども、人は生きなければなりません。命ある限り生き続けること、これは生き残ったものの使命です。

亡くなった方々が遺してくれた言葉の数々は、必ずや立ち上がる杖になり、生きる糧になるに違いありません。

子どもを、親を、かけがえのない命を亡くされた被災者の皆さんに、「頑張れ」という声は掛けられないけれど、ただ、力強く立ち上がって欲しいと願っています。

文藝春秋の2011年8月臨時増刊号「つなみ」の扉には、気仙沼で一人の少年が、避難所からもらったと思われるだぶだぶのジャンパーにピンクの長靴という出で立ちで、両手に水の入ったペットボトルを下げ、口を固く結び、伏

し目で歩いている写真と、塩野七生さんの一文が掲載されています。塩野氏によると、イタリア人の記者がこの写真を見て、「面構えがいい。日本は必ず再興する」といったといひます。

この臨時増刊号「つなみ」は、東日本大震災から生き延びた子ども達を書いた震災の記録集です。

子ども達の作文を通して、子ども達が地震や津波の恐怖と闘い、必死で生き延びたこと、年長の子ども達が小さな兄弟を命がけで守ったことなどが、生々しく伝わってきます。家が流されただけでなく、親兄弟を亡くした子も大勢いますが、皆生き残ったことを大切に、しっかりと生きていこうとしています。

「つなみ」を編集されたジャーナリストの森健氏は、子ども達が紡いだ言葉から、震災をきっかけに成長しつつあることを教えられたと述べていますが、私も同感です。

この「つなみ」には、被災地の子ども達を撮った写真も掲載されていますが、子ども達の屈託のない笑顔が印象的です。それは、厚い雲間から差し込む光です。その屈託のない笑顔が、子ども達から再び奪われることのないよう願って止みません。

その為にも、我々は、3月11日のことを決して忘れてはならないのです。

(塾頭 吉田 洋一)